



第8号 2014.7.20 発行
 発行者：株式会社協進印刷
 編集者：JO 編集委員会

どんな境遇の生徒でも、 好きな野球に打ち込ませて あげるのが教育です。

(二財) 神奈川高等学校野球連盟
 専務理事 名塚 徹さん



県立弥栄西高校、県立希望ヶ丘高校で16年間野球部監督を務め、平成4年度より県高野連理事、平成17年度理事長に就任。平成24年度には公益法人改革による一般財団法人への移行に伴い専務理事に就任。現在県立港北高校で国語科の教諭を務める傍々、神奈川県高野連を幸じて多忙な日々を送っています。
<http://www21.ocn.ne.jp/~knbf/>

江森..いよいよ今年も球児たちの夏が始まりますが、まずは神奈川大会の展望からお聞きしたいと思います。

名塚..一言でいえば「混戦模様」ということです。そうはいつてもシード校にそれなりに強いチームが残りましたので、「柱のある混戦」といったところでしょうか。

江森..本命はやはり横浜高校なのでしょうが、春はもうひとつ調子が上がらないようでした。

名塚..そうですね、エースの伊藤君の出来次第というところもあるようですが、それでも昨年の夏・秋、今年の春と続けて横浜が県大会で優勝しているところをみると、やはりどこか強いところがあるということではないかと思っています。

江森..今年の大会誌「高校野球」にも掲載されていますが、巨人軍原監督のご尊父原貢さんが亡くなりました。

名塚..大変残念なことですね。本当に神奈川の高校野球を飛躍的に発展させてくれた方ですの:

江森..私が小学生の頃ですが、原、津末の三番、四番コンビで一世を風靡した東海大相模を率いた原貢監督の功績は、やはり大きいのですね。

名塚..それは大きいですよ。それまではバントなど小技でつないでいくのが高校野球だったものを、豪快に打って勝つというスタイルを確立したのが当時の東海大相模です。ちょうど金属バットが出始めた頃ということもあったと思いますが、高校野球にとって大きな転機であったのは間違いないでしょう。

江森..その当ても高校野球はすごい人気でしたが、最近またブームといえますか、人氣がうなぎ登りのような気がするのですが、現場の感覚とははどうですか。

名塚..確かにここ5年ぐらい、観客の方はすごく増えていると思います。

江森..理由として何か思い当たるようなことはありますか。

名塚..不景気だったこともあるのですが、子どもと野球観てお弁当食べて、1日500円で楽しめるというので、子ども連れの人がとても増えた時期がありました。そのころお父さんに連れられていた子どもたちが、いま現役の選手やマネージャーとしてベンチに入っている世代です。ですからその親御さんとか、おじいちゃんおばあちゃんを観に来てくれるというのは理由のひとつでしょう。

もうひとつは港町である横浜には明治時代、既に外国から様々な人が来て、その中には野球の上手い人たちもたくさんいたはずですから、他所では観られない本場の野球が観戦できたということも、下地として

あるのではないかと思います。

江森..野球観戦が文化として根付いているということでしょうか。

名塚..勝負ですから当然勝ち負けはあるのですが、勝ち負けを見に行くというよりも、野球場の雰囲気とか、勝負の運の流れ、そしてたとえ応援しているチームが負けたとあま表に出さず、どちらかといえば淡々としているというのが神奈川の野球ファンの特徴であるように思います。

それはプロ野球にも表れていて、ベイズターズの試合はベイズターズの勝利を見に行っているというよりは、ナイター照明のもと、ビールを飲んで、大声出しているという野球観戦そのものを楽しみに行っているように思いますね。

江森..それはありますね。勝ちを見に行くんじゃ、やっつけられないというのもあると

江森..それはありますね。勝ちを見に行く

江森..それはありますね。勝ちを見に行く

思います(笑)

名塚..もちろん、そのうえ勝つてくれれば気持ちはいいけど、負けただからって「二度と来ねえよ」ってことでもない(笑)

江森..野球にしてもサッカーにしても、メジャーなスポーツが「部活動」という制度に支えられているというのは、日本独特の文化なのではないかと思いますが。

名塚..世界的にみればクラブチームに所属するというのがスタンダードなのでしょうから、部活動がこれだけ盛んだというのには、世界的にも珍しいでしょうね。それが故に学校は大変ですが…

江森..教員の労働時間の比較で、日本が先進国中最も長いという結果が出ているようですが、学校の先生の仕事が多岐にわたってくる中で、日本のメジャースポーツの裾野が学校の先生たちの努力のみによつて支えられているというのは、少し問題なのではないかと思つています。

名塚..私などは、部活動がやりたくて教員になつたクチだから(笑)、部活動はまったく苦にならないのですが、それ以外の仕事が増えてきて部活動の時間がとれなくなつてきていることの方が問題ですね。最近の傾向として、部活動はできるだけ外部の指導者に任せて、教員は授業や学校運営に集中すべきだとの声もあるようですが、部活動によつて教えられることもたくさんあるわけですから、学校や教員がきちんと関わらなければならない。

例えば、当然スポーツをやるには場所や用具が必要になってある程度お金がかかりますが、お金を出せる生徒はスポーツができるけど、お金が出せなければスポーツは



できないなんて、そんなのは教育じゃない。だからこそ学校の部活動を通じて、お金のあふれる生徒もいない生徒も関係なくスポーツに打ち込むことができる環境を作っていくというのは、本当に大事なことです。

用具にしても子どもは誰だつて良いものが欲しいし、流行のものを15人のうち12人が持つていけば、残りの3人だつてやっぱり欲しくなる。でも家庭の事情で買えないとなれば、野球をやつていけるが故に悲しい思いをすることになってしまう。それもまた教育とはいえないでしょう。

江森..高野連としては、過剰な用具については禁止しているということですか？

名塚..禁止とまでは言つていませんが、必要以上に高価なものを使わせないように指導は高野連としてもお願いしているところ。大切なことは、あれがダメこれがダメとうことではなくて、例えば金銭的に苦勞している生徒が悲しい思いをするような部活動であつてはならないということ。つまり家庭とか、身体とか、国籍とか、競技とは関係ないことで生徒が悲しい思いをするような部活動であつてはならないということです。

江森..仲間との絆や思いやりを相手に理解させることも教育というわけですね。私の



母校には数年前に女子選手がいましたが、女子は試合には出られないですよ。

名塚..男女の別となると話は少し違います。野球は男女混合のスポーツではありません。サッカーにしろ、バレーボールにしろ、ほとんどのスポーツは男女混合ではないわけで、女子が野球をやるなら「女子野球」をもつと普及させる努力をすべきです。

江森..確かに女子ソフトボールはありますが、女子野球はあまり聞きませんね。

名塚..女子は体が柔軟だから、もしかするとこれまでになく変化球など生まれるかもしれないよ！カーブしてからシュートとか！

江森..(爆笑) 昔の野球マンガにありましたが、そういうの！ しかしサッカーの例を見ても、女子野球が発展するのは野球界全体にとつて良いことです。高校には女子野球部というのもあるのですか？

名塚..まだ学校数が少なく高野連とは別組織での運営なので正確ではありませんが、関東で見れば5〜10チームぐらいいはあると思います。男子の夏の大会の参加校が190校ですから、女子も20チームぐらいいはあると思います。

江森..それは楽しみですね。指導者不足などの問題はないですか？

名塚..それは確かにあります。また指導者が忙しくて余裕がないですね。本当は放課後ほもつと生徒と一緒にいたのですが…。特に野球部の顧問は体育科以外の教員も多く、野球部の顧問をやりたいがために教員になつたような人が多いのです。それだけに部活に思うように時間が割けないというのは、つらいところでもあります。

江森..今後の高校野球を取り巻く課題についてご意見を聞かせてください。

名塚..それはいろいろあると思いますが、まずは生徒の身体が弱くなつてきていることかな。最近の子どもは骨が弱くなつていから、デッドボールとか自打球とかで簡単に骨折しちゃうんですね。骨折対策で防具をつけるように指導するなんてことになるかもしれない。

江森..少子化の影響もあるでしょうね。部員数は減つていきますか？

名塚..神奈川はなんとか減つてはいませんが、やはり生徒の数自体が減つてきているので、とにかく3年間続けさせるにはどうしたら良いかというようなことは、顧問会議などでも話題にのびります。これは以前からの傾向ですが、中学校の野球部員数に比べて高校は約半分、やはり中学で野球をやめてしまう生徒が多い。そこで高野連では高校野球の指導者による中学生対象の講習会を定期的に開催しています。これによつて「僕にもできるかもしれない」と自信を持つてくれる生徒は多いようです。

Jリーグができて野球人口が減つたように言われますが、部員数でいうと横ばいから、最近ではまた少しずつ増えてきていますので、神奈川の高校野球もまだまだ伸びていくと思つています。引き続きご支援お願ひします。

横浜市青葉区に地域のための新しいビジネス拠点

「まちなかbīzあおば」がオープン

「パートやアルバイトではなく、もつと社会と関わる仕事がしたい」「自分の可能性に賭けて独立したい」と思っている人も、いざ起業となるとなかなか思い切れない…。そんな方に朗報です。

バーチャルオフィス機能を備えたビジネス交流拠点「まちなかbīzあおば」が、今年6月横浜市青葉区のためプラザにオープンしました。会員は、事務所登記や郵便物受取、電話代行などのバーチャルオフィスのサービスのほ

か、会議室レンタル等のリアルオフィスサービスが割安の月会費で利用できます。と、ここまでは通常のバーチャルオフィスと同じですが、地域に特化した「まちなかbīzあおば」では、会員同士はもちろん、地域住民、行政、地元企業などとの交流イベントを積極的に展開。会員起業家が地域に深く入り込むことで、地域の課題やニーズをいち早くキャッチし、自らのビジネスにつなげることができ環境づくりを大切



んな人たちのニーズがあります。誰かを頼るのではなく、私たち自らの力でより良い街を作っていく拠点にしたい」と夢を語ってくれました。青葉区方面にお住まいの方、また青葉区に拠点

運営するのは、
起業家支援団体のNPO法人協同労働協会OICHI。理事長の坂佐井雅一さんは「地域にはたくさんの課題があり、またその解決を待ち望んでいるたくさ



を持ちたいとお考えの方、きつと力強い味方になってくれると思いますよ。
▼地域活動応援プラン…月会費2160円
▼ライトプラン…月会費5400円
▼スタンダードプラン…月会費15984円
いずれも税込、別途入会金1万円。
<http://www.machibiz.com/cms/>

モノづくりの ある街

第四回 「元町」文・写真 竹見正一

こんにちは！竹見です。

今日は地元横浜、元町のデザイン事務所に向かって電車に乗っています。

あつという間に到着、心地よい冷気に未練を残しつつ下車した京浜東北線石川町駅。とたんにじわっと肌にはり付いてくる生温い空気、梅雨まつ盛りを実感します。ギリギリと誇らしげに照りつ

ける夏のお日様に、一刻も早くお会いしたいと思うのは私だけではないでしょう。海に飛び込んでひと泳ぎ、磯が上がって極冷え缶ビール。そんな夢想で長い階段を駆け下り、首都高の高架下に隣接する改札を抜けると、右手に伸びるのが元町ショッピングストリート、重苦しい曇天をかき消すような夏模様のショップが軒を連ねています。ビビッドカラーの水着やビーチサンダル、浴衣のディスプレイ。冷製パスタ、ざるそば、

冷やし中華のはり紙。打ち水薫るパシンの店頭。一本山側のクラフトマシンのショップストリートへ少し寄り道なにかしたもので、夏のおおりに乗っかって行きたいなあって気分が増大。サマージャム95。そんな気分がさせてくれる、いつも元気な元町。

全国にいくつも存在する「元町」ですが、ここ横浜の元町命名の由来はちょっと切ないのです。時は1859年横浜港開港のころ。開港場を建設するため、元々あった横浜村の民家を現在の「元町」の位置に移設、そこを元村と呼んだそうです。その名には、塀の向こうになつてしまった自分たちの横浜村の変貌をみながら、本当の横浜村はここだよ、という強い気持ちが込められ、元村

↓元町と記されたようなのです。その思いは、今も凛々しく少し切なく、元町の佇まいに継承されている気がします。遠い情景に思いを馳せつつ、気がつけばストリアートの出口、フェニックスアーチがどんと鎮座しています。そのすぐ先にあるのが、目的の満月デザインさんのオフィス。ここに

くれば何でも解決しちゃうという、クリエイティブシェアオフィスです。とんとん、こんにちは。さくさく打ち合わせをすませ、帰りに彼女にかける言葉はいつも、「寝てくださいいね(笑)」。夜中に車で脇を通ると、いつも光がともっているオフィス、午前3時の入稿、早朝のメールも即



レス。クオリティもさることながら、パワーと責任感、恐れ入ります。外に出ると、しとっと一雨きた様子の石畳。雲の切れ間にみえた、15時の太陽。その光線の強さを肌に感じ、思い出したように心が躍り始めました。もうすぐ、夏だ！





濱の市

大口の魅力を紹介する「大口自慢」。今回ご紹介するのは魚屋カフェ「濱の市」さんです。

毎日市場から届く新鮮な魚料理を堪能できるこのお店のオーナーは、市場では知らない人はいないという有名な、金一グループ会長の坪倉良和さん。「魚屋から日本を変える」の言葉どおり、本業以外にも横浜魚市場の理事から大学講師まで幅広く活躍中です。坪倉オーナーおすすめメニューは日替わり定食750円。魚料理1品にご飯・味噌汁・漬物に加え、10種類以上の手作り惣菜がバイキング方式で食べ放題！特に火曜日の金目鯛の煮つけは大人気で、これを目当てに遠方から来る常連さんもあるそうです。

そんな濱の市に話題の新メニュー「鯨カレー」が登場。鯨肉が柔らかく煮込まれたルウをこだわりの十六穀米にかけ放題！さらにトッピングに鯨カツをあわせれば、「鯨カツカレー」の出来上がり。牛肉や豚肉に比べてさっぱりヘルシーな鯨カツにはキャベツとニンニク醬油もついていて相性抜群！クセになりません！「オーストラリアに喧嘩売ってるだろ？」と茶目っ気たっぷり語る坪倉オーナーですが、このメニューは「子どもの頃に屋台の手伝いをしたご褒美で食べた鯨カツが忘れられない」というご自身のソウルフードなのだそう。



鯨カレー 850円 トッピング鯨カツ 300円

大口自慢

魚屋カフェ濱の市

横浜市神奈川区大口通2の7

☎: 045 (633) 7835

営業時間: 午前10時~午後9時

定休日: 毎週水曜、年末年始など

<http://kaneiti.net/business/hamanoichi>

Kyoshin TODAY

TTTプロジェクト発進

5月17・18日の両日東京ビッグサイトで開催された「インナーナショナル・アート・イベント・デザインフェスタ vol.39」において、TTTプロジェクト第1弾作品、どいせなさんデザインのメモパッドを販売しました。表紙デザイン3種、メモデザイン8種、紙も途中で切り替えるという贅沢な仕様です。目玉焼きのデザインが一番人気で完売したほか、残りの2種も数冊しか残らないという嬉しい結果となりました。



TTTプロジェクトとは「つくる、つながる、つづく」をコンセプトにした若手クリエイター支援プロジェクト。若手クリエイターの作品をプロダクトに展開して販売。売上の50%を次回の制作活動費に充て、クリエイターの制作活動を継続できるように支援しています。

救急キットを社用車に常備 FAプロジェクトに参加しています

「災害・事故などの際に救急キットを提供し、助け合う街を創りましょう」というコンセプトのもと、(株)エルプティンターナショナルが発起人となり、横浜市営バスや消防団等横浜を中心に500以上の企業や団体が参加する「FA (ファーストエイド) プロジェクト」に参加しました。



今回搭載した「外傷用応急処置キット」にはFAと書かれ

た目立つステッカーがついていて、早速会社の入口と社用車に貼りました。AEDの設置と合わせて、少しでも地域の安全に貢献できたらと考えます。
(参考 URL <http://www.elpuentairnti.com>)

産業医による健康相談はじめました

今年度の事業計画にもある「いきいきと働ける職場環境づくり」の実現にむけ、職場環境改善のひとつとして、産業医の河下太志先生による、従業員の健康相談を実施しました。この取り組みは、神奈川県印刷工業組合の産業医委託契約のサービスを活用したものです。高額な委託料を会員企業で分担し、小規模企業でも手軽に専門家によるカウンセリングを受けることができます。

何かとストレスの多い現代、悩みの軽減や解消、自覚症状のない病気の早期発見につながることを期待しています。

祝 日本チャンピオン奪還!

いつもお世話になっている協力会社「Uebara Paper Works 株式会社」の「優希」こと上羽優希さんが、この度J-NETWORKスーパーフライ級王者に返り咲きました！おめでとつございます！



JO (ジエイ・オー) 2014年7月号 (第8号)

発行者: 株式会社協進印刷

横浜市神奈川区大口仲町108番地

TEL: 045 (431) 6611

FAX: 050 (3730) 6273

URL: <http://www.kyoshin-print.co.jp>

